志賀重昂の『南洋時事』

—文明批判の脆弱性—

荻原 隆

序論

本稿は志賀重昂の出世作となった『南洋時事』(明治二〇年)を取り上げる。これについてはかなり論じたことがあるが⁽¹⁾、再構成し、とくに初期の思想とのかかわりの中で分析しておきたい。

注

- (1)「志賀重昂の国粹主義」(『名古屋学院大学研究年報』13, 平成一二年一二月)。なお、最近の関連の拙稿として「日本における伝統型保守主義はいかにして可能か—志賀重昂との関連で(上)」(『名古屋学院大学論集(社会科学編)』第四三巻第四号, 平成一九年三月)、「日本における伝統型保守主義はいかにして可能か—志賀重昂との関連で(下)」(『名古屋学院大学論集(社会科学編)』第四四巻第一号, 平成一九年七月)、「志賀重昂における国粹主義の観念—概念の両義性と論理の混乱」(『名古屋学院大学論集(社会科学編)』第四五巻第二号, 平成二〇年一〇月)、「志賀重昂の『日本風景論』—欧米的景観への憧憬」(『名古屋学院大学論集(社会科学編)』第四六巻第二号, 平成二一年一〇月)などがある。

一 思想形成—伝統への関心の不在—

(一) 生い立ち

志賀重昂は文久三(1863)年九月一五日、岡崎の大字康生(現在の岡崎市康生町)に生まれた。幼名は練蔵、号は矢作川にちなんで矧川または矧川漁長。没したのは昭和二(1927)年四月六日で、数えて六四歳であった。父親は志賀重職(愷堂)、母は淑子(志く)、妹にえつがいる。妻は(松野)鉄千代。父は庶子の出ながらなかなかの傑物で、藩の推挙を受けて昌平黌に学び、帰国して藩政に参加するほか塾を開き門弟を育てた。「五万石でも岡崎さまは、お城下まで舟がつく」の唄ではないが、岡崎藩は小藩ながら徳川家康ゆかりの地としてまた三河武士の故郷としての誇りが高く、父や塾生も幕府への忠誠意識から薩長に強硬論を唱えてしばしば藩の上層部をてこずらせている。志賀重昂も明治政府に対してかなり屈折した感情を持っており、また、国体思想的観念がそれほど強烈に出てこないのは佐幕派・三河武士の末裔意識からであろう。父重職は明治元年に急逝し、藩の規定で跡継ぎが一五歳未満の志賀家は家禄没収となり、貧窮を味わうことになった。しかし、父の門人たちの支援で明治五(1872)年、岡崎小学校に入学、翌々明治七(1874)年、上京して攻玉塾(のちの攻玉社)にはいることになる。攻玉塾は近藤真琴によって創設され

た海軍軍人志望者の予備校で明治の三大私塾としても有名。志賀はトップクラスの成績を収めた。その後、明治一一（1878）年に大学予備門に合格、しかし翌々年の明治一三（1880）年四月、予備門を去って同年の八月に札幌農学校にはいった。明治一七（1884）年七月、満二〇歳で農学校を卒業している。

詳しい自伝のようなものが残っていないので、若き日の志賀がどのような傾向や気質あるいは考え方を持っており、そしてどのように自己の思想を作っていたのかはよく分からない。彼は札幌農学校二年生の時に『在札幌農学校第貳年期中日記』⁽¹⁾を残しているが、これは明治一四年七月九日～翌一五年七月一二日に至るたった一年の記録に過ぎず、それ以外残っているものといえば（この日記とともに残された）農学校卒業くらいまでの日記の断片やメモ、履歴書といった程度のものにすぎない。彼はのちに「十年前録」一～四（『亜細亞』第一卷第六号（明治二五年一月）～第二卷第一，四，五号（同二六年二，五月））⁽²⁾、「初対面録」一～七（第三次『日本人』第三～九号，明治二八年八～十一月）⁽³⁾、「自由党と予」一～十（『新潟新聞』，明治二八年一〇月一〇～三十一日（断続的に掲載））⁽⁴⁾、あるいは「私の学生時代」（『中学世界』第九卷第四号，明治三九年三月二〇日）⁽⁵⁾などを書いて、主に札幌農学校時代の人々との出会いを回想しているが、これも内容などから見て自伝というほどのものではない。こういったものだけで彼の初期思想を描き出すことは少しむずかしいが、それ以外にはさしたる資料がないので、ともかくこれらを手がかりに彼の思想の成り立ちを考えてみよう。

なお、伝記について触れておく。志賀の死後しばらくして、その秘書であった後藤狂夫によってまとめられた『我郷土の産める世界的先覚者 志賀重昂先生』（昭和六年，警眼社・松華堂）はやや身びいきで客観的に志賀の仕事を評価しているとは言えないが、長年その身边に仕えた者の手になるだけあって、よくその呼吸や人となりを伝えている。宇井邦夫『志賀重昂一人と足跡』（平成三年，現代フォルム）は手際よくコンパクトに志賀の人生と思想・業績を伝えており、とくに石油資源に関する志賀の先見性に注目・評価している。また、戸田博子編著『生誕百三十年記念誌 志賀重昂－回想と資料－』（平成六年，非売品）は関係者の思い出をたんねんに収集していて、興味深いエピソードを窺うことができる。また、志賀家の系譜や高林公毅編の詳しい「年譜・解説」が載っており、便利である。同じく高林公毅『私版 志賀重昂伝』（平成一三年，遺稿出版委員会）は著者の逝去により未完に終わってしまったが、関係状況を豊富に盛り込み、また志賀に対する並々ならぬ思い入れが感じられる。伝記としてはこのような著書を参考にした。

注

- (1) 志賀の『在札幌農学校第貳年期中日記』は志賀富士男編『志賀重昂全集』八巻（昭和二～四年，志賀重昂全集刊行会）の第七～八巻にも収録されているが、誤りが多いと言われているので、北海道大学附属図書館北方資料室所蔵の原本と亀井秀雄・松本博編著『朝天虹ヲ吐クー志賀重昂『在札幌農学校第貳年期中日記』－』（平成一〇年，北海道大学図書刊行会）を使用する。後者には詳細な解説と注記がある。
- (2) (3) (4) いずれも中野目徹氏によって戸田博子『生誕百三十年記念誌 志賀重昂－回想と資料－』（平成

六年、非売品)に収録。また、雑誌『日本人』のタイトルの変遷・総目次については有山輝夫・日本近代史料研究会『雑誌『日本人』・『日本及日本人』目次総覧』I～V(昭和五二～九年、早川図書)参照。

- (5) 前掲『志賀重昂全集』第八巻収録。これは『中学世界』(第九巻第四号(春季増刊号)、明治三九年三月二〇日)の「名士の学生時代実話」に「志賀重昂君」として掲載されたもの。

(二) 伝統性や文明批判の不在

まず、『札幌農学校第貳年期中日記』を読むと、あたりまえと言えばそれまでなのだが、学習や試験、あるいは寮生活や学生仲間との交友などの学生生活の記述が中心になっていることにすぐ気がつく。これは多少期待はずれという気がしなくもない。我々は志賀(四期生)の上級生になる内村鑑三や新渡戸稲造(いずれも二期生)というそうそうたる人々とその魂の転回の物語をよく知っており、はからずもこの日記は明治一四年七月九日の卒業式、内村や太田(新渡戸)ら六人のとうとうたる卒業演説、そして卒業生を代表して内村が下級生に送った励ましの言葉を一年生を終えんとしていた志賀が感涙をもって聞くという劇的な場面構成から始まっているので⁽¹⁾、いささか過剰な思い入れをして読むのであるが、日記にはそのような内面的苦悩とか、魂の告白といったものは出てこない。三期生たちはキリスト教に入信しないという盟約をたてて札幌に来たと言われ⁽²⁾、四期生の志賀(三期生入学の後、翌明治一二年は本科生がほぼ定員に達したため募集中止、彼は翌々一三年入学の四期生⁽³⁾)自身も内村の激励に奮い立ち、やがて終生変わらぬ友情と尊敬を内村に捧げることになるのだが、しかし、ここでは「嗚呼氏ハ耶蘇教ノ徒ナリ故ニ常ニ吾輩ト仇敵タリシ」⁽⁴⁾と書いている。耶蘇教の仇敵に宗教的回心を期待してもしかたがないが、それにしても札幌農学校、内村、太田(新渡戸)と背景がそろっているのだから、おおいなる内面的苦悩や煩悶をなかば勝手に期待して読むのであるが、志賀はどう見ても内省的な人間ではなかったようで、宗教的苦悩はもちろん文学的あるいは哲学的な煩悶からも縁が遠かった。

このことと関連するが、この日記には文明論的な考察もない。とうとうと流入する西洋の近代文明に対し、青年特有の賛美と反発の入り混じった葛藤苦悩のごときものがあったとしてもよさそうだが、この点も期待して読むと肩すかしを食った気になる。それでは西洋近代文明に対する反発がないとしても、志賀は後年わざわざ国粹主義を唱えたのであるから、さだめし、日本の文化や風物などに対する深い愛着や誇り、(国権的・政治的というよりはむしろこの場合、文化的な意味での)ナショナリズムのようなものが横溢しているであろうと想像してこの日記を読むのであるが、特別その気配もない。

たとえば明治一五年三月二六日のところに「午前手島ノ為メニ神道ヲ以テ国教ト定ムベキ説ヲ草ス」⁽⁵⁾と記してあり、多少気にならないでもない。手島はおそらく手島十郎で同期生⁽⁶⁾、背景は不明だが、なにか宗教をめぐる学生どうしの議論でもあったのだろうか。志賀は耶蘇嫌いでたまたまこんな主張をしたのであろうが、ここでも宗教をイデオロギーとしてしかとらえていないようで、また、神道国教説もこれかぎりである。神道に深く傾倒するような「宗教家」にも「伝統主義者」にもなれなかった。

もっとも次のような「初対面録」七回の記述は少し面白い。それは明治一六年、農学校の夏期

休暇に志賀が青森方面に旅行し、浪岡駅で北畠顕家の故址を訪れ、茶店に休息した時のことである。顕家は親房の嫡男で義良（のりよし）親王を奉じて陸奥に下り、やがて奥州の軍勢を率いて足利尊氏と戦うが敗死。志賀は浪岡城址を訪ねたと思われるが、この城は顕家から数えて四代目の子孫顕義の構築したもので、旧浪岡村、旧浪岡町、現在の青森市浪岡にある。茶店の老女が彼をいぶかって、どこから来たのかと尋ねた。彼が三河からだと言えると、老女はいたく驚きまたおおいに同情して、それはおそらく子細な事情のあることであろうと、たった二銭の茶代を受け取ろうとしなかった。彼は内心微笑しながら、日本にはこのように正直な国民がいる、正直な政府がありさえすればと慨嘆するのである⁽⁷⁾。これなどは日本人論として展開できれば多少面白いところであり、後年の国粹主義者が、たとえば日本人はほんとうに正直か、もしそうだとすればそれはなにゆえにか、というような歴史的文化的問いかけに発展すれば興味深いのだが、しかし、これも政府に対する慨嘆でとぎれてしまっているのである。

注

- (1) 前掲亀井・松本編著『朝天虹ヲ吐クー志賀重昂『在札幌農学校第貳年期中日記』一』、九九～一〇〇頁。
- (2) 北海道大学『北大百年史 通説』（昭和五七年、ぎょうせい）、六六頁。
- (3) 同、四六頁。なお、これまでの官費制から、志賀の入学時には貸費制に変わった。志賀は後年自分は五期生であると回想しているが、思い違いで、正しくは一年募集停止のあとの四期生である。志賀の回想については「私の学生時代」（『中学世界』第九卷第四号（春季増刊号）、明治三十九年三月、『志賀重昂全集』第八巻に収録）参照。
- (4) 前掲亀井・松本編著、一〇〇頁。
- (5) 同、一七八頁。
- (6) 前掲『北大百年史 通説』、四六頁参照。手島は志賀と同期の合格者である
- (7) 「自由党と予」二、『新潟新聞』（明治二八年一〇月一日）、「初対面録」七、第三次『日本人』第九号（明治二八年一二月五日）。

(三) 政治的立場

また、日記にとくに政治的記述が多いとも言えないのではないか。もちろん志賀も政治の動向についてそれなりの関心を持っている。たとえば明治一四年の政変に関連しては、開拓使官有物払い下げ問題についての学生の討論会の議長をつとめたり（明治一四年一〇月一日）、やや遅れて政変一払い下げの中止、大隈参議の追放、明治二三年の国会開設一のニュースを聞いたり（同一〇月一六～七日）、国会開設の詔勅に感涙したり（同二五日）といったぐあいである。あるいはその頃、ロシアの虚無党に感激し露帝の前で惨刑にあう夢を見たりしている（同一八日）。しかし、これくらいならすぐに国士を気取りたがる当時の学生としては普通の反応であろう。北海道で自由党の組織作りに活動して農学校にも学生の勧誘に来たという噂の本多新にははなはだ軽蔑的で（明治一五年五月一日）、志賀は物好きにも本多を訪ねて行っているが、一度目は会えず（同一六日）、二度目は約束をすっぱかされたうえに、垣間見た別の民権家の行状にもあきれて、ほうほうのていで引きあげている（同二〇日）。こうして日記を読むかぎり、その時々

事件も学業生活のせわしさの中にかき消されていったように見える。

しかし、志賀は、あるいは志賀もと言うべきか、自由民権運動には親近感を持っていた。回想録「初対面録」や「自由党と予」によると明治一六年の夏期休暇に福島事件の公判を傍聴し、河野広中らの堂々たる風体に壮烈な言動に強い感銘を覚え、彼らが「圧制の政府は転覆せざる可らず」と言を発するにおよび、おもわず涙を流している（「初対面録」一⁽¹⁾、「自由党と予」二⁽²⁾）。志賀は農学校卒業直後に自由党に加わろうか考えた（「初対面録」四⁽³⁾、「自由党と予」一⁽⁴⁾）。しかし、藩閥政府に対決すべきかどうかさんざん迷ったあげく、ついに決断がつかなかった。考えて見れば、これほど待遇のよい学生生活を送れたのも政府のおかげではないか。どうする、どうすると思案の末に、自分はそれほどの大物でもないとな納得することにしたと自嘲気味の告白が面白い（「自由党と予」一⁽⁵⁾）。

志賀の政治的スタンスには少しばかり複雑な事情があろう。彼は徳川家ゆかりの岡崎藩藩士の子として必然的に明治新政府には面白からぬ感情を持っていた。少し触れたが、父重職（控堂）は庶子の出でありながら、学識・気概ともかなりの人物で、藩命により昌平黌に学び、許されて本家と分かれて一家を起し（五人扶持ながら士分、なお、本家は千石、のち六百石と言う⁽⁶⁾）、藩政に参与し、また、門人を指導した。重職は長州征伐に際し、岡崎藩に従軍の幕命がなかったことを恥辱とし、門人とともに長州征伐に加わらんとして露見し、禁固に処せられている。戊辰戦争の官軍の東上にあたっては、門弟らが脱藩してこれに抗し、黒幕と目せられた重職はふたたび禁固の処分を受けたが、脱出して京都に潜伏した。このころ、京都に在役中の甥が長谷寺の僧に襲われ瀕死の重傷を負ったが、重職は武士の面目にかけてついにこの者を探し出し、みごと斬殺して仇を討ったと言う⁽⁷⁾。武士の血が騒ぐタイプであった。重昂がのちに地理学者として、東奔西走、世界を股にかけて旅行探検して歩いたのも父の血筋で、じっとしているのが苦手だったのであろうか。

志賀は若い頃は「日陰の唐黍」⁽⁸⁾と称されるほど痩せていたが、壮年は堂々たる体軀を誇っている。豪放磊落で声も大きく、またすこぶる健啖家であった⁽⁹⁾。東洋豪傑をいささかきどっていたのであろうが、こういう気概的性格も父譲りであろう。

前述のように、この父も明治元年、重昂が満五歳の時に亡くなり、彼は母淑子の実家である松下家に引き取られ、失職武士の一族の通例に漏れず、辛苦をなめた。小学校にはいった頃は、筆記用具にも困るほどであったと言う⁽¹⁰⁾。そして、明治七年、満十歳の時、かつて父の門人であった陸軍中尉鳥羽大作の助力によって上京、攻玉塾に学ぶことになるのである⁽¹¹⁾。重昂は明治政府にさだめし敵意を持っていたであろう。しかし、明治政府のおかげで厚遇の学校に学ぶこともできた。政府によってわが家は路頭に迷ったが、最高学府に学ぶ機会を与えてくれたのもこの政府である。当時、学士号を出していたのは東京大学とこの札幌農学校のたった二つに過ぎない。学士様ならお嫁にやろうかと言うのではないか。政府のおかげで志賀はともかくもエリート階級の入り口に立つことはできた。明治政府に対する気持ちは複雑であった。

彼が自由民権運動に共鳴しつつ、結局自由党入党を思いとどまり、やがて自由民権というもっともラジカルな所からではなく、国粹主義といういわば中間的な地点から明治政府を批判する途

を選んだのも、こういう微妙な感情がその伏線のひとつになっていよう。

注

- (1) 「初対面録」一，第三次『日本人』第三号（明治二八年八月五日）。
- (2) 「自由党と予」二，『新潟新聞』（明治二八年一〇月一日）。
- (3) 「初対面録」四，第三次『日本人』第六号（明治二八年九月二〇日）。
- (4) 「自由党と予」一，『新潟新聞』（明治二八年一〇月一日）。
- (5) 同。
- (6) 前掲戸田編著，一四五頁。
- (7) 志賀の先祖，とくに重職（愷堂）のこと，また生い立ちなどについては主として前掲後藤書の「志賀家の祖先と分家創立」・「先生の生立」と前掲戸田編著のとくに高林公毅編「年譜・解説」を参照した。
- (8) 「自由党と予」二，『新潟新聞』（明治二八年一〇月一日）。そこには「日陰のコルン（コーン）」と呼ばれたと書いてある。
- (9) 前掲後藤書，一二六～三〇頁。
- (10) 同，一二～三頁。年齢は前掲戸田編著の年譜・解説により補正。
- (11) 同，一四頁。年齢は前掲戸田編著の年譜・解説により補正。

（四）新天地へのあこがれ

志賀は農学校時代によく旅行をしている。日記本文および〔雑録〕に付された記録から主なものを拾い出してみると，常（定）山溪温泉行（明治一四年七月，一週間ほど），小樽行（同一五年四月，五日ほど），後志（しりべし）・石狩行（同一五年七月，五日ほど），渡島（おしま）函館・青森・弘前行（同一五年七～八月，一ヶ月），胆振（いぶり）樽前火山行（同一六年一月，五日ほど⁽¹⁾）といったぐあいであり，その他にもヨーロッパへ行こうと思ってドイツ学とフランス学を始め，東京まで行ったが，帰ってきたとか，カムチャツカに渡ろうとして寸前で中止したなどと経歴に書いてある⁽²⁾。志賀の旅行好き，冒険好きがよく分かる。

そう言えば，かつて攻玉塾に学んだのも，海とか冒険とかに心惹かれものがあつたからかもしれない。彼は岡崎の小学校を出たあと，前述のように明治七年に攻玉塾に入り，そこで優秀な成績を収めた。近藤真琴の創設した攻玉塾は福沢諭吉の慶応義塾，中村敬字の同人社と並称された当時の三大私立学校で，多くの海軍士官を輩出していることで有名であつた。志賀よりすこしあとの明治一一年に攻玉塾にはいった堀内文次郎の談によれば，慶応はハイカラ，同人社は保守的，攻玉塾はその中間の学風であつたと言う⁽³⁾。義理の従兄弟の志賀二郎がすでに攻玉塾を卒業し，その教師をしていた⁽⁴⁾。そのつてもあつたのであろう。また，同校は海軍兵学校の予備校の観を呈していたから，志賀も海軍士官になりたかつたのか，あるいは海洋ロマンに心ときめくものがあつたのであろうか。札幌農学校に学んだのも，その貸費制（当初の官費制から貸費制となつた）が魅力であつたからだろうし，薩長のお膝元の東京には出世もおぼつかない，この際新天地に新しい夢とロマンを求めようと思ったからでもあろう。志賀の経歴・経験はたしかにのちの大旅行家・地理学者を彷彿させる。

注

- (1) 胆振の樽前火山の爆発を農学校教師の宮部金吾と見に行ったことは「初対面録」二（第三次『日本人』第四号（明治二八年八月二〇日））にも書いている。
- (2) 前半の二つの旅行は、前掲亀井・松本編著の志賀の日記本文に書いてあり、その他も含めて日記の雑録（同、二五七～八頁）に履歴風にまとめられている。
- (3) 攻玉社編『近藤真琴先生伝』（攻玉社維持会、昭和一二年）、二一七～八頁。
- (4) 前掲戸田編著、一四三～四頁。

二 『南洋時事』－文明批判の脆弱性－

（一）南洋航海へ

志賀重昂は明治一七（1884）年に札幌農学校を卒業したあと、同年、長野県中学校長野本校の教員になった。これは札幌農学校時代の教師であり、今はそこを辞して文部省御用掛をしていた宮崎道正のはからいによる⁽¹⁾。宮崎はその頃大学予備門長をしていた杉浦重剛と友人であり、志賀もかつて一時予備門に学んだ。『南洋時事』の批文も杉浦に書いてもらうことになる。彼らはいずれものちに政教社に集まる面々である。また、農学校一期後輩の今外三郎も翌一八年長野県中学校上田支校に赴任し、彼もやがて『日本人』同人となる。ところが、一八年の九月、志賀は中学校在職中たまたま同じ料亭にいた長州閩の県令木梨精一郎の横柄な態度に腹を立て、ビールを浴びせてひと騒動起こし、翌日免職のはめになったとみずから回想している⁽²⁾。たった一年の長野県の教員生活であったが、そこでも冒険好きの彼は赴任直後にさっそく学生とともに戸隠山に登って「長野戸隠山紀行」を書いている⁽³⁾。

中学の教師をやめた志賀は上京し、父の門人、小柳津要人の丸善でほんのしばらく翻訳関係の仕事をしてはみたが、新天地への衝動は抑えがたく、つてを頼ってダーウィンよろしく豪州に遠洋航海を向かう筑波への同乗を認められ、明治一九（1886）年二月九日、品川から南洋に出発することになる。同艦は海軍初代の練習艦で、江頭安太郎以下一九名の士官候補生も乗り込んでいた⁽⁴⁾。『南洋時事』および後述の「南洋巡航日記」・「南洋巡航紀聞」・「漫旅備忘録」などから旅程をまとめると、一行はまず、二月二六日カロリン群島のクサイ島に寄り、三月末オーストラリアのニューカッスル、四月五日シドニーに到着、四月の末にシドニーを出港して、五月にニュージーランドを訪問、ついで六月フィジーそして七月サモアに周り、九月にはハワイのホノルルに入港、十一月二日に品川に帰ってきた⁽⁵⁾。翌明治二〇（1887）年四月に『南洋時事』は出版された。

彼の出世作となった『南洋時事』を中心にその思考的特徴を分析する。

注

- (1) 高林公毅『私版 志賀重昂伝』（平成一三年、遺稿出版委員会）、七六頁。
- (2) 「初対面録」四、第三次『日本人』第六号（明治二八年九月二〇日）。
- (3) この紀行文については戸田博子編著『生誕百三十年記念誌 志賀重昂一回想と資料一』（平成六年、非売品）

八三～九〇頁に翻刻され解説がある。

- (4) この時の候補生の名簿や旅程などは、海軍教育本部『帝国海軍教育史(明治百年史叢書)』第一巻(昭和五八年,原書房),四八五,六三四～六頁。また、江頭安太郎の航海報告が『時事新報』(明治一九年一月九日)に載っている。
- (5) 志賀の南洋歴訪については前掲高林書第二部, Masako Gabin, *Shiga Shigetaka 1863-1927: The Forgotten Enlightener* (Richmond:Curzon Press,2001),ch.4(pp.65-97.)に詳しい。

(二) 「南洋巡航日記」・「南洋巡航紀聞」

志賀は『南洋時事』(明治二〇年)刊行に先立ち、明治一九年二～一一月にわたる南洋歴訪中に「南洋巡航日記」を『時事新報』に六回にわたって報告している(五月二五,二六,二九日,六月二,一〇,一一日)。これによれば、二月二六日クサイ島寄港,三月二八日オーストラリアニューカッスル入港,四月五日シドニー着となっており,オーストラリアまでのいわば往路の航海日記である。シドニー寄港中には同地夕刊紙 *The Echo* に四月一〇,一七,二四日の三回にわたって“The Japan of To-day – The Land of The Mikado –”を掲載し,日本の現状を紹介している⁽¹⁾。また,帰ってすぐにこの日記の補遺とも言うべき「南洋巡航紀聞」を『時事新報』に寄せている(一二月八,九,一〇,一四,一五,一六,一七,二〇,二一日)⁽²⁾。ここには四月五日シドニー着,同二八日シドニー抜錨,五月二日ウェリントン着と書いてあり,オーストラリアとニュージーランドの旅行記・見聞録となっている。「南洋巡航紀聞」の一節として「日本と豪州との貿易」も論じている(一二月九日)。

The Echo 紙への寄稿を除き,『時事新報』に乗せられた「南洋巡航日記」・「南洋巡航紀聞」と題する計十五,六回の報告や論説は『南洋時事』の抄出ないし予告編であり,「南洋巡航紀聞」のうち「日本と豪州との貿易」(一二月九日)および「豪州夢物語」(同一五日)・「豪州の前途」(同一六日)はそのまま題名ごと『南洋時事』の各章に収まっている。これらの論説は,近代と伝統や土着,西洋と東洋,あるいは西洋と南洋の相克というような格好の文明論の素材を前にしながら,近代文明批判という点で本編と同様,物足りないものに終わっている。

たとえば「南洋巡航日記」から最初の寄港地クサイ島の報告を取り上げてみよう(五月二五,二六,二九日『時事新報』掲載,同島の話は修正されて『南洋時事』第一,二章を構成)。クサイ(Kusaie, Kosrae, コシャエ, コスラエとも)島はスペイン領カロリン諸島の東部諸島の中でも東端に位置し,当時ドイツ領であったマーシャル諸島に接している。彼はこのカロリン諸島を当初ドイツ領と思い(『時事新報』,五月二五日),のちに,ドイツ・スペインの係争地だったが,明治一八(1885)年一二月,両国協議の上,スペインに帰属したと紹介している(『南洋時事』第一,三章)。同諸島はその後,明治三一(1898)年の米西戦争の結果,翌年ドイツに買収され,さらに,日本,アメリカと統治者がめまぐるしく変わり,現在は西カロリン諸島がパラオ(ペラウ)共和国,中部およびクサイ島を含む東部カロリン諸島はマイクロネシア連邦を構成している。

この「南洋巡航日記」が全体として地理的・気象的な興味から書かれているのはしかたがないし当然としても,島の文明の変容にも触れており,格好の題材にもこと欠かなかった。志賀は,

ある（おそらく欧米の）捕鯨船が島の女を連れ去ったため、島民が怒って船長水夫を皆殺しにしたという話を紹介している⁽³⁾。もちろん、志賀の言うように、島民のやった行為ははなはだ野蛮である。しかし、この発端は捕鯨船にあり、婦女の拉致に島民が激怒するのは当然で、欧米の文明の裏面にある侵略性・野蛮性を考えさせるには十分な題材である。

ところが、彼は島民の残虐性だけを指摘し、捕鯨船の乗組員のやった犯罪的行為にはなんら批判めいたことは言っていない⁽⁴⁾。福沢のような西洋主義のチャンピオンですら『文明論之概略』（明治八年）で、日本、インド、中東、東南アジア、太平洋各地、中国における列強の残虐と横暴をあげつらい、文明化とは——一面から見れば——、なんのことはない、非白人が白人の奴隷になることであると激しく怒っているのにである⁽⁵⁾。やがて国粹主義者として登場する志賀のことであるから、さぞかし、クサイの島民が近代文明と引き換えに失ったものに想いをはせ、彼らの苦悩に深い同情を寄せ、西洋文明を糾弾してもよいのではないかと我々は思うのだが、そうはなっていない。志賀は、近代文明の影響を受けてここ二〇年くらいの間に、島民の教育の水準・文化のレベルはだいぶ上がった、宣教師にもよくなっている、アイヌ人よりはずっとましであろうと書いて済ませている⁽⁶⁾。

「南洋巡航紀聞」は「南洋巡航日記」の補遺にあたり、前述のように、そのいくつかはそのまま題名ごと『南洋時事』の各章を構成している。志賀は「南洋巡航紀聞」の掲載に際し、世に美術的紀行文は多いが、実用的実利的なものも欲しいと書いている⁽⁷⁾。これで彼の旅行の目的はよく分かる。たとえば、「南洋巡航紀聞（「日本と濠洲との貿易」）」（明治一九年一月九日）は『南洋時事』初版の第七番見出し以下（第七章相当）にそのまま収まっており、その内容は日本はいま殖産興業に躍起になっているが、できた商品の販路もよく考えておかねばならない、その意味でオーストラリアは有望な市場だというもので⁽⁸⁾、近代文明批判どころか、西洋諸国のあと追いにすぎないではないか。文明の衝突という生々しい現場にせっかく立ち会いながら、志賀の記事はたしかに実利的であるが、文明論としてはピントがズレてしまった。

最後に *The Echo* に載せた “The Japan of To-day – The Land of The Mikado –” (I ~ III) であるが、日本の文明化の進展をなんとか先進国にわかってほしいと力がいっていて、陸海軍や教育機関や農産物の現状を統計数字を挙げて一生懸命説明している。無理からぬ努力ではあるが、欧米をスタンダードにするのではなく、むしろ、近代文明に対する鋭い批判、文明間の葛藤とか、日本文明の独自性についての考察のようなものがほしい。

注

- (1) *The Echo* 紙はまず志賀本人を紹介し（四月八日）、続いて彼の日本紹介記事を載せている（同一〇、一七、二四日）。この原文が福井七子『『エコー』に見る志賀重昂の日本論』（『関西大学文学論集』第一巻第三号、平成四年二月）に紹介されている。また、前掲戸田編著に一〇日の記事の最初の部分が翻訳されて載っている。同書、九九頁。
- (2) 「南洋巡航日記」や「南洋巡航紀聞」などを含めて『南洋時事』執筆当時の志賀については前掲戸田編著、九一～九頁参照。

- (3) 「クサイ島の制度（『南洋巡航日記』）」、『時事新報』（明治一九年五月二九日）。
- (4) 同。
- (5) 松沢弘陽校注・福沢諭吉『文明論之概略』（平成七年、岩波文庫）、二八一～九二頁。
- (6) 「クサイ島の制度（『南洋巡航日記』）」、『時事新報』（明治一九年五月二九日）。
- (7) 「何をか旅客と謂ふ（『南洋巡航紀聞』）」、『時事新報』（明治一九年一月二日）。
- (8) 「日本と濠洲との貿易（『南洋巡航紀聞』）」、『時事新報』（明治一九年一月九日）。

（三）『南洋時事』

（1）書誌的解説 『南洋時事』については『日本風景論』と違って書誌的解説が見当たらないので最初に多少この点に言及しておく。

同書は管見に属するかぎりでは少なくとも四版を重ね、内容的にも加筆修正がなされている。まず、初版は明治二〇年四月に丸善商社書店から出た。これは前年の二月に帰国してから一気呵成にというか、だいぶあわただしく書き上げたと見え、目次も章立てもなく、章の代わりに丸印の下に見出しが付けてあるだけであった。見出しの数は全部で一八（195頁の漢詩数行は題に丸印が付けてあるが、見出しに数えない）。なお、本文は196頁。これに英文の序詩や、自題、天台道士（杉浦重剛）の批文、自序、著者識、緒言を巻頭に、自跋を巻末に載せている。

二版は初版から半年後の明治二〇年一〇月に同じく丸善から出ている。二版自序その他が巻頭に新しく付け加えられた。同版からは、目次と章が付き、体裁が整ってくる。初版の見出しをそのまま章に移行させて、章の数は全部で一八、初版の見出しの数と変わらないが、構成をやや変え、初版六番見出し「^バ拿^マ運河ト南洋経済トノ関繋。」は自注に記すように第一三章に移動してある。したがって、初版七～一三番見出しが、二版では順に第六～一二章と繰り上がる。なお、目次で第一七章「布哇国ト日本。」は本文では第一六章と誤記されていて、これは三版、四版でも見逃され、全集版で訂正された。二版の内容は本質的に初版と変わらないが、たとえば第三章に七頁ほど当時の航海日記（「旧稿」・「日乗」とあり、おそらく「南洋紀行」であろう——「南洋紀行」は戸田家蔵の志賀自筆日記であるが、筆者はごく一部以外未見）の一説や関連文献を引用したり、第一章でシャルルマーニュ大帝の偉業に言及しているが、それをフランク民族の特質の発揚としてたえる七・八行ほどを追加したほか、この章の後半に対馬開発の参考文献を載せ（西門子⁽¹⁾稿「対州記事」——これは別に頁が打ってあるが）、また、第一七章ではハワイの政変を五～六頁にわたって紹介加筆するなど、これらによって本文の頁数は220に増えた。また、巻末に日本の新聞雑誌の書評を多数載せ、さらに*The Japan Mail*新聞の書評を原文のまま掲げている。

増補三版は明治二二年一〇月出版。出版所は同じく丸善。三版自序は二版自序を簡略化して使っている。三版も一八章編成で章数自体は二版と変わらないが、文章も多少手直しした上に、さらに構成も少し変え、二版第四章「航海歌。」を第三章「南洋ハ多事ナリ。」に入れて章の数を一つ減らし、二版第五～八章を順次第四～七章に繰り上げ、あらたに第八章「濠洲列国ノ合縦独立セントスルー大傾向。」を起こして（明治二二年一月執筆と自注あり）、挿入し、オーストラリ

アの独立の気運を紹介しながら、国粹主義について論じている。ただし、ところどころで活字のポイントを落としている章がいくつかあり（たとえば、第二、三、四章）、また、第一章後半の北海道と対馬開発論を付録に回したりしたため、本文は205頁に減っている。そして、七章からなる付録が書き加えられた。付録の内容は、本文第一章の後半に相当する北海道や対馬開発論（内容は手直しされているところがある）に、八丈島や台湾やインドなどの地理、社会、開発、貿易論である。巻末の書評部分は二版にほぼ同じ。

訂正四版は明治二四年二月出版。発行所は丸善で変りがない。四版は自題・批文の類の配列が多少変更され、この版のための自序が書き加えられた他、本文の表現にも若干の直しがあり、第四章「南方ノ好隣国。」にオーストラリア各州の地理的データが別表にして載せられたりしているが（頁は打ってない）、本文内容は三版と基本的に変わらず、本文頁数も205と三版に同じ。付録、書評部分も三版に同じ。

なお、『志賀重昂全集』には収録した著作の書誌的解説がほとんどないうえ、同全集の第三巻に収録された『南洋時事』の場合、巻頭の英文の序詩、自題、杉浦の批文、初版自序、著者識、緒言などを残し、二版以降の自序を削ってしまっているため、編集者の第三巻「凡例」だけを手がかりに読むと初版が採ってあるように錯覚してしまうが、全集が底本としたのは四版である。三版と四版は内容的には同一と言ってよいが、前述のように四版には第四章にオーストラリア各州の地理的データの一覧表があらたに加えてある。全集本にもこの表が載っており、これで四版が底本になっていることが判明する。その他、四版は表現などを多少手直ししてあり、細かく見ると、英文の固有名詞の表記にも若干の違いが見られる。たとえば、三版、「加之」（緒言三頁）、「其艦ヲ奪ヒテ此嶋ニ寄着シ、竟ニ永住シタル者ナリ。」（一二頁）、「又云フ、（以下二行）」（二〇五頁）が、四版ではそれぞれ「加之ナラズ」（緒言三頁）、「其艦ヲ奪ヒ、タヒチー島土人ノ婦女ヲ携ヘテ此ノ島ニ寄着シ、竟ニ永住シタル者ナリ。」（一一頁）、「削除」（二〇五頁）と修正され、三版「ニュー、ギニー」（初版自序一頁）、「ウ井タコ」（目次二頁）、「ヴ井クトリヤ」（七一頁）、「ヴェーベル」（一六一頁）が、四版ではそれぞれ同頁で「ニュー、ギニー」（初版自序一頁）、「ウ井タコ」（目次二頁）、「ヴ井クトリヤ」（七一頁）、「ヴェーベル」（一六一頁）と表記されており、全集本は四版の表記に従っているから、ここからも全集本が四版を使ったことがわかる。ただ、全集本では、前述のように巻頭の自序については初版のものだけを残し、巻末の書評もすべて削除されている。

なお、無署名であるが、志賀が書いた「赤道線を横過するの記」や「漫旅備忘録」一～三などが『日本人』（第四、八、九、一二号、明治二一年五、七～九月）に載っている。これは『南洋時事』の補遺と言うべきものであるが、「漫旅備忘録」の一、二はすでに「南洋巡航紀聞」に紹介済みで、一は「南洋巡航紀聞」（一二月一四日分）、二が同（二〇～一日分）である。

(2) 文明批判の脆弱性 書誌的解説はこれくらいにして、『南洋時事』の内容に入ろう。南洋という明治の日本人にとっては新しい世界を紹介した着眼点のよさと、それがかもし出すロマンティズムやエキゾチズムによってであろう本書はベストセラーとなり、志賀重昂の名を世間に知らしめた（先述のように、本書二版以降には多くの新聞雑誌の書評が掲げられている）。我々は

保守主義という観点から、ここでも西洋と南洋の相克、近代と土着の光と影、それを巡る若き志賀の苦悩というようなテーマをつい期待してしまうのであるが、しかし、本書はとうてい文明批判の書としては読めないものである。世界は大きく動いている、南洋とて例外ではない、列強は次々に南洋の開発に乗り出しているのではないか、日本も遅れてはならない。本書の目的は開発、貿易、移民における南洋の豊かな可能性を啓蒙するところにあった。経済的・商業的と言うか、まことに実利的な意図の下に書かれた本である。

もっとも、この本は旅行記であり、しかも、当時としてはほとんど知られざる南洋を舞台にしているだけに、全編にただよう異国情緒に旅情を誘われるような気分になるかもしれない。書き出しは「立てよ、汝ら大和の国の子孫よ、その手には大きな仕事が待っている、」と始まる英文の序詩で、気宇壮大な中にもロマンチックな響きがある。我々は異国情緒やロマンティズムをとかく反近代や反文明に結びつける傾向があるが、本書をそのつもりで読むと誤解してしまう。志賀の意図は明快で、南洋における移住、開発、貿易の促進というまことに実利的な、現実的なものである。日本がうっかりしている間に、欧米の南洋進出が急速に進んでしまった。日本も乗り遅れてはならない。貿易の市場として、そして、余剰人口の移民植民先として南洋を開拓せよ。けれども、欧米に伍して南洋の開発や貿易に乗り出そうというのは、彼らの真似であり、近代主義者の路線の踏襲になってしまう。国粋主義者——本書には国粋主義の萌芽が見られる（後述）——にこれからなっていく者は、近代化に後進地域があるいは伝統文化がどう立ち向かうかということも南洋の原住民とともに考えなくてははいけない。そういう題材にはことかかなかった。

ところが、第一章（以下、何章というのは、とくに断らないかぎり、初版の見出し順により、二版以降の章の順番とは一致しないところがある）「^{クサイ}克撒以嶋ノ地形。」は先述の「南洋巡航日記」での報告をもとにしており、クサイの島民も宣教師の教化でだいぶ従順になった、ある島民は自分たちに親切ならどこの国が来てもよいと言っている、志賀はこう伝えて済ましてしまう。続く第二章「^{クサイ}克撒以嶋土人ノ減少。」は白人との接触によって新たな熱病が持ち込まれ、原住民の人口が急速に減ってしまったという内容である。けれども、志賀は文明に怒ったり、島民に同情するよりも、黄色人種に生まれた自分がうらめしい、それは運命とあきらめ、力の及ぶかぎり努力せねばという調子で、日本人が白人との競争に耐えられるかどうか気がかりであった。

それでも、第一章「新西蘭ト日本。」、ニュージーランドのマオリ民族の衰亡の話にはさすがに涙が出たらしい。「又此土人ノ年々減少スルコトハ猶我ガ蝦夷人ノ減少スルガ如キモノニシテ、太ダ愍ム可キニ似レドモ、所謂優勝劣敗ノ作用ナレバ將タ誰レヲカ咎メン乎。「マヨリ」土人亡国ノ歌アリ、重訳シテ曰ク。（中略）意匠悲涼纏綿轉チ江州司馬ガ青衫ヲ湿ハシムルニ足ル可シ。」⁽²⁾。しかし、それも優勝劣敗の結果でかたづけ、一片の感傷はあるが、ただそれだけのことである。やや突き放した、冷淡な見方になっているという印象は拭えない。

第一二章は「^{ゴールドスミス}我爾德斯弥斯氏ノ荒村感懐（“Deserted Village.”）ノ詩ヲ読ミテ感アリ。」と感傷的な見出しがつけてある。ゴールドスミス（Oliver Goldsmith, 1730頃－74）はイギリスの詩人、戯曲家、小説家。この詩『寒村行』（*The Deserted Village*, 1770）の他、随筆『世界の市民』（*The*

Citizen of the World, 1762), 詩『旅人』(*The Traveller*, 1764), 小説『ウェークフィールドの牧師』(*The Vicar of Wakefield*, 1766) などがよく知られている。

このゴールドスミスの詩をふまえた旅愁をさそわれる章の題名に、西欧対南洋の図式とは少し違うが、近代対伝統、もしくは都市文明対農村生活のそれを予想して読むと、完全に裏切られる。

まず、最初にシャルルマーニュ大帝の偉業を回顧し、フランク民族(言うまでもなく、アングロサクソン民族などとともにゲルマン民族を構成)の雄渾な精神に感動する(この点とくに二版以降に明らかとなる)。次に彼の思いはドーヴァー海峡を渡ってイギリスに向かい、ゴールドスミスのこの長編の詩を取り上げて、土地の兼併の進行により、荒廃した農村の有様、産を失い家を捨てた農民の悲境は涙なくしては読めないと言いながら、この詩人の死後いくばくもなく、アングロサクソン民族はオーストラリア、ニュージーランドをたくましく開拓し、原住民を追い払って、そこに豊かで美しい田園を作り上げたと言を転じていく。悲哀に満ちたタイトルとは違って、何のことはない、ゲルマン民族ことにアングロサクソン民族たるイギリス賛歌、その開拓者魂、気概敢為の精神に対する賛美なのである。これもいたって近代的、西欧的な基準で書いてある。

第一三章でも酋長ウイタコからふたたびマオリ族の悲境を聞くが、話題はまたも日本の存亡に移っていく。「嗚呼日本モ亦竟ニ新西蘭ナル哉。亡国ノ箕子天ヲ仰ギテ咄々ト呼ブノ秋モアランカ。嗚呼予輩日本人民ハ新西蘭ノ宗社覆滅ノ活劇ヲ目撃シテ、心私ニ猛省スル処無カル可ケン哉。」⁽³⁾。マオリ族を悪しき先例として、日本はそうならないことに志賀の関心が注がれていた。

第一四章では志賀は老宣教師ランガムからフィジー島の文化の変遷について話を聞いている。けれども、クサイ島の風俗の変容を報告する場合と同じで、原住民が自治や誇りを喪ってしまったことに一応同情しながら、獐猛凶悪の食人種とばかり思っていた彼らだがどうしてすこぶる従順素朴である、これも教化のたまものであるというような話を老宣教師の回想を交え以下のように報告している。なお、引用中の師とはランガムである。

「当時「ムバウ」島(師ガ居住スル処。)ニ土人ガ所謂神霊ヲ祭祠スルー大屋アリ。屋ノ中央ニ石台アリ、若シ夫レ大祭ノ日ニ当レバ、土人等相会シテ俘擒ヲ此処ニ誘ヒ、コレヲ執ヘテ其頭ヲ石台上ニ据ヘ忽チシテ石棍ヲ取りコレヲ痛撃シテ顛殻ヲ粉碎シ氣息ノ絶滅シタルヲ見テ神霊ニ捧ゲ、尋デ老幼男女相合シテコレヲ炙リ海水ヲ和シテ塩梅シ、舌ヲ打チテ賞味スルヲ例トセリ。然ルニ何ゾ凶ラン、今日此処ニハ真成ノ上帝ヲ頌美スルー大寺院ヲ建立シテ、復タ人類ヲ犠牲ニ供スルモノ有ル無ケン。」⁽⁴⁾

キリスト教の教化を受けて、原住民のいまわしい食人の風潮が絶えたというのであるが、こう書けば原住民に同情するどころか西洋礼賛である。もとより、冷静・客観的に見れば、西洋文明(キリスト教)の教化によって原住民の食人の習俗がやんだのは良いことではあろう。西洋文明は罪悪の面だけでなく、光明の面を持っていたのは間違いない。しかし、そうだとすれば、西洋文明の光と影を鋭く凝視しなければならないのだが、志賀がこの点についてさほど深く考えたとも苦

悩したとも読めない。

第一六章のタイトルは「撒毛亜国王ニ謁スルノ記。」で、サモア王は酒に溺れ、真剣に国政を考えていない。人民も柔弱となり、国が滅びゆくのもむべなるかなという内容である。この時のサモア王はマリエトア・ラウペパ (Malietoa Laupepa) である⁽⁵⁾。サモアの実情はそのとおりだとしても、西欧の侵略を厳しく断罪せずにこう言うだけでよいものであろうか。前一五章「丹蛾羅亜 (タンガローアポリネシアの神) 神霊ノ夢物語」でサモアを巡る列強の侵略と駆け引き、明治一八 (1885) 年にサモア王に対してタマセセ (Tamasese Titimaea) がドイツの支援のもとに反乱を起こしたが、この時は英米の介入で失敗に終わり、そしてサモアがアメリカの保護を受けることになったいきさつをかなり詳しく紹介しているののである。

第一七章「布哇国ト日本。」では、ハワイ島の政治経済の実権は白人と中国人に握られてしまった、島民は独立の名はあれど蟬の抜け殻のようなものと報告しておいて、「嗚呼前車ノ覆、後車ノ轍、豈ニ猛省スル処無カル可ケンヤ。豈ニ猛省スル処無カル可ケン哉。」⁽⁶⁾と続く。ハワイであれ、クサイであれ、南洋諸島の原住民についての志賀の感慨はちょうど中国の植民地化に対する大方の日本人の感じ方と同じで、隣国の状態はまことに気の毒ではあるが、これを悪い手本として、日本をそうさせてはならないというところにあった。また、二版以降ではハワイの政変について書き加えている。これは一八八七 (明治二〇) 年にサトウキビ産業を支配する白人が武力クーデターを起こし、自分たちに有利な「銃剣憲法」をカラカウア (David Kalākaua) 王に認めさせた事件であるが、ここでもハワイの混乱を報じ、政府の無能力や王の横暴に批判めいた書き方で、特段原住民に同情的とも見えない。ちなみに、同王の死後、妹のリリウオカラニ (Lydia Kamaka'eha Lili'uokalani) が女王となるが、これを最後にハワイ王朝は滅ぶのである。

(3) 平和主義 こうして、文明批判としては実に貧弱な『南洋時事』ではあるが、ただ、志賀は南洋における我が物顔の西洋人に羨望を感じながらも、私は「兼併主義」を奉ずるものではないと断っている。武力を使ったり、土地を奪うという意味での植民地政策には反対だった。日本人が海外に移住し、おおいに商業農業に活躍して欲しいと思うばかりであると。

「我人毎ニ白人種ノ跋扈強梁ニシテ威ヲ全世界ニ震フアルヲ觀、且其壯図ヲ想望シ、時ニ或ハ自カラ貧弱国ニ生レ黄人種トナリテ世ニ出デタルヲ転タ恨ムノ觀念無キ非ラズ。然レドモ是レ已ム可カラザルモノニシテ」⁽⁷⁾

「余輩毎ニ英国ノ軍艦ガ煤煙ヲ燻ラシ国旗ヲ海風ニ翻ヘシテ宇内到处ノ港湾ニ入り来レバ、所在ノ英国移住民ハ盛粧炫服シテ或ハ馬ニ跨リ車ヲ驅リテ誠実熱心ニコレガ好来ヲ迎フルノ状況ヲ目撃シ、心私ニ癢痒ニ勝ヘザル処アリ。然レドモ余輩ハ兼併主義ヲ懐抱スルモノニ非ラズ、植民政略ヲ唱道スルモノニ非ラズ、唯海外到处ニ我同胞ノ移住散在シテ商業ヲ営ミ農事ニ服センコトヲ奨説スルモノナリ。(中略) 世ノ壯士ヨ、旅館ノ二層樓ニ在リテ徒ニ空々タル妄想ヲ抱キ欲吞支那四百州ノ句ヲ誦ンゼズシテ、請リ徐ニ図ル処アレヨ。漫ニ空中ニ城樓ヲ築コト莫レ。漫ニ国姓爺ヲ学ブコト莫レ。漫ニ山田長政ヲ学ブコト莫レ。海外到处ニ商業的ノ新日本ヲ創造スルコト、汝ガ今日ノ急務ナレ、汝ガ今日ノ急務ナレ。」⁽⁸⁾

志賀は欧米諸国がうらやましいと正直に語りながら、「兼併主義」には反対であると。このへ

んはいちおう西洋文明批判になっている。この点を突き詰め、深めてみるべきであったが、根底に西洋への憧憬があるため、不十分という観は否めない。(なお、志賀は第二章の終わりで、白人に対抗して中国との連係を主張しているが、その場合も「英国ト気脈ヲ通ジ」しておくことが必要とされ、イギリスにはずいぶんと気を使っている⁹⁾。後年の、というよりもじつは最初から志賀はアングロサクソン崇拝者であるが、当初は中国との連携も少しは考えてみたのであろう。しかし、第一章後半ではこれとまったく矛盾して、将来中国と東洋貿易の覇権を争うことになる、中国はああ見えて恐るべき相手だと言っているから、どこまで本気で日中連携を考えていたかは非常に怪しい。志賀は結局、親英米主義者であって、アジア主義者にはなれなかった。その点で彼は慧眼の持ち主であるとも言える。)

志賀の札幌農学校の先輩にして畏友内村鑑三の名著『余は如何にして基督信徒となりし乎』(明治二八年)も、南洋ならぬアメリカに旅立った人間の魂の物語である。舞台こそ違え、西洋文明の光と影の交錯する状況設定は志賀と共通する¹⁰⁾。しかし、内村は文明の希望と絶望を見事に抉り出しつつ、なおかつキリスト教という希望におのれを賭けようとした。内村の『余は……』は深い文明論としても読むことができるが、『南洋時事』はこの意味でとうていそれに及ばない。

(4) **国粹主義の萌芽** ところで、『南洋時事』初版のとくに一三章には、マオリの酋長ウイタコと会ってイギリスの植民地となったいきさつを聞く場面のあとに、国粹主義の萌芽と見える考え方がかなりはっきりと出てくる。そして、面白いことに、その国粹的観念と平和な商工立国を結び付けるかのような発言をしている。

「日本人民ニシテ日本国ノ存亡ニ憂慮スル処無ク、唯自己ガ朝三暮四ノ生計ニ困ム処無キヲ以テコレヲ度外ニシ、自己唯ダ計リテ国家百年ノ命脈ヲ放棄シ、是レヲ白眼ニ冷視セントセバ是レ可ナリ。然レドモ予輩ハ日本国ノ独立ヲ永遠ニ保維スルノ一大義ヲ以テ第二ノ宗旨トナスモノナリ。予輩ハ日本国民ノ良友ヲ以テ自カラ任ズルモノナリ。共同平和ノ大義ヲ以テ日本国ヲ経緯セントスルモノナリ。日本国ヲ商工ノ邦国トナサントスルモノナリ。日本人ガ固有ノ稟賦タル美術的ノ観念ヲ永遠ニ保維センコトヲ冀望スルモノナリ。大和男児ガ固有ノ氣象ハコレヲ保全センコトヲ希願スルモノナリ。嗚呼芙蓉ノ峯、琵琶ノ湖、美ナル邦土哉。上帝豈ニ偶然ニコレヲ日本人民ニ賦与センヤ。日本ノ秩序ニ改良ス可キモノアレバ、漸クコレヲ改良ス可シ。破壊ス可キモノアレバ、漸クコレヲ破壊ス可シ。苟ゾ過激急進ノ手段ヲ是レ用ヒン。過激急進ハ真成ノ愛国士ガ取ラザル処ナリ。余輩ノ協賛セザル処ナリ。語ヲ寄ス、民間不平ノ志士才子ヨ、諸君ガ不平ヲ洩ラス其方アリ其法アリ、曷ゾ水滸伝中ノ豪傑ニ是レ倣フコトヲ用ヒンヤ。其方法トハ何ゾ。興産企業是ナリ。然レドモ余輩ハ常ニ世ノ論者ガ興産企業ヲ奨説シテ、而シテコレニ着手スルモノ無キヲ怪ムナリ。請フ何ゾ隗ヨリ始メザル、請フ何ゾ隗ヨリ始メザル。」¹¹⁾

ここでは「国粹」そのものではないが、「固有ノ稟賦」「固有ノ氣象」という言葉が使われている。断片的ではあるが、志賀が日本の伝統について語るのはこれが最初であろう。ついでに言うと、二版の第一章にもフランク民族の特質に言及して「固有ノ稟賦」という言葉がでてくるが、引用部のほうは日本人の気質を論じ、ある程度の説明もあるから、こちらを分析してみる(なお

また、三版以降の第八章「濠洲列国ノ合縦独立セントスルー大傾向。」には、オーストラリアの独立の気運を論じながら「国粹」という概念そのものをはっきりと使っているが、注書きにもあるように、この章は明治二二年一月にあらたに加筆されたものであって、初版、二版にはない。この三版、四版の第八章に出てくる国粹の観念については前掲の拙稿を参照)。

さて、ここでの「国粹的」観念を見ると、彼の主張は日本の独立を保持し強くするところにあるのか、それともなんらかの伝統を維持復活させたいのか、両者がよく整理されずに、混在している。ようするに、日本の強盛が国粹なのか、伝統の保持復活が国粹なのか分からず、両義的である。これはやがて志賀の国粹観念の決定的弱点となってくる。日本を国家として強くしたいだけなら、引用文に言うように「興産企業」はその有力な手段となる。しかし、この方向は近代化そのものであるから、伝統の維持とは一般に鋭く矛盾し葛藤を起こす。したがって、この両者は簡単に並列できないのであるが、あたかもそれができるとごとく並べられている。こういう重大な弱点が結局最後まで整理されずに続いていくのである。

ただし、このような混乱はあるが、志賀が日本の伝統の核心(「固有ノ稟賦」)を武士道とか国体思想と言わず、美術的観念であると述べているのは注目に値する。志賀は武士道を高く評価していたし、国体思想についても国粹主義の重要な一部であると見ていたのは間違いないが、それ以上に美的観念を国粹・伝統の中心に置いていたことがここでまず分かる。やがて、さらにその美の本質は調和(平和)にあるという解釈を示すことになるが、ここでも、美術的な国粹の特質をなんとなく「共同平和ノ大義」と並置させている——なぜ関連するのかについて説明がないのは問題であるが——ように見える。

そうすると、日本の伝統に従って我々は美→(調和)→平和を重んじるから、武力主義で行くのではなく、商工立国で行くのであるというように解釈できる。このように論理的脈絡を補ってやると伝統(美)、平和、商工立国がなんとかまとまる。こう読めるかどうかもうひとつ判然としないが、もし読めるとするとまことに興味深い発想である。日本の伝統(平和)を生かしつつ、それを未来(商工立国)に結び付けようとしているからである。たんに商工立国・殖産興業を説くだけならいくらでもあるが、それを日本の伝統に結び付けるもの、日本の伝統を平和な商工立国に生かそうという発想は当時ほとんど類がない。

なお、引用文の最後に出てくる「過激急進」の徒、「民間不平ノ志士」がなにを指すのか明らかではないが、おそらく民権家などを意識しての発言であろう。破壊ばかりを旨とするのではなく、着実な生産に従事せよというような言い方は『日本人』における志賀の論説にもしばしば出てくる⁽¹²⁾。ここには徳富蘇峰あたりの影響があるのかもしれないが、志賀と民権家との微妙な距離感が出ている。志賀も民権運動に惹かれながら、その破壊性に多少嫌気がさしていたことも、この陣営に加わろうとして思いとどまった一因であろう。

注

- (1) 西門子の本名は『南洋時事』(二版)の第二章「対州記事」についての志賀の紹介文を読むと財部元次郎である。

- (2) 同 (初版), 九三～四頁。
- (3) 同 (初版), 一二八頁。
- (4) 同 (初版), 一三一～二頁。
- (5) 前掲戸田編著の年譜(高林公毅)には国王タラポーとあるが(二一一頁), マリエトア・タラヴォウ (Malietoa Talavou) は明治一三 (1880) 年に死んでいる。その後を襲ったのが, マリエトア・ラウペパである。なお, 岩左嘉親『サモア史 (上)』(昭和四五年, 大陸書房) 参照。
- (6) 『南洋時事』(初版), 一六九～七〇頁。
- (7) 同 (初版), 一五頁。
- (8) 同 (初版), 一九三～四頁。
- (9) 同 (初版), 一六頁。
- (10) 西洋文明との出会いという視点から内村と志賀を比較研究したものに鈴木範久『内村鑑三とその時代－志賀重昂との比較－』(昭和五〇年, 日本基督教団出版局) がある。とくに同書第四章参照。
- (11) 同 (初版), 一二八～三〇頁。
- (12) たとえば「開国後の日本」(第一次『日本人』第一一〇号, 明治二一年九月三日) 参照。そこでは薩長の横暴ぶりに憤慨するとともに, 過激民権派がいかに生産力を毀傷したかを名指して怒り, 壮士達に農工商業せよと力説している。

三 小結—伝統への関心の不在と文明批判の脆弱性—

志賀の生い立ち・初期の思想から『南洋時事』を考察してきたが, まず, 農学校時代の日記を中心とする初期資料から次のようなことが言える。ここからは, 志賀の内省性も文明論も, 日本主義や(富国強兵というよりはむしろ文化的精神的な意味での)ナショナリズムも, 政治性も強く浮かび上がってこない。この点から見て, 彼は生来の伝統主義者ではなかった。

政治性については, 明治政府に対する複雑な感情や学業の忙しさなどから意識的に押さえられたというところがある。しかし, 文明論やこれに関連した内省性のようなものがないのは問題である。素朴な西洋近代文明批判やそこから生ずる伝統への回帰といった萌芽があれば, なぜ志賀が後年国粹主義を唱えるに至ったかという必然性が思想内在的に了解できる。ところがこういう気配が初期資料からはうかがえない。もとより資料が少ないので断定的なことは言えないが, 志賀の最初の著書であり出世作となった『南洋時事』(明治二〇年)も文明批判という点で実にもたたりない。これは志賀の国粹主義が文明批判というよりも, 別の理由から選ばれていったものではないかということ類推させる。たとえば, 政教社の同人は哲学館関係と東京英語学校関係の二つの人脈があるが, 志賀は後者の人間関係の中にいた。また, 明治政府に対する反発と感謝のいりまじった感情が, 自由民権というストレートな地点からではなく, 国粹主義というワンクッションおいた政府批判の立場を選ばせたとも考えられる。いずれにしても, 志賀の国粹主義が思想内在的な必然性からでなく, むしろ人間関係や政府に対するいわばイデオロギー的感情から選ばれたものであるとすると, それはさまざまな思想的弱点や問題を抱え込むことになる(その点については冒頭にあげた拙稿を参照されたい)。ところで, 初期資料からは国粹主義に至る内面的必然性が浮かび上がってこないと言ったが, 彼が旅行や小冒険をおおいに好んでいたこと

はよく伝わってくる。のちの地理学者・大旅行家のおもかげはすでに十分である。

次に志賀の最初の著書でありデビュー作でもある『南洋時事』であるが、本書の目的は南洋は貿易・産業・移民に有望である、開発競争で日本も欧米に遅れを取ってはならないという主張に尽きており、異質文明の不可抗力的受容とその苦しみという生々しい植民地の状況を目の当たりにしながら、文明論ことに文明批判としては内村の『余は如何にして基督信徒になりし乎』にはもとより、福沢の『文明論之概略』に比べても弱い。原住民に深く同情しているようにも見えないし、ともに怒っているようにも読めない。彼らを悪しき先例として、日本がそうならないことだけに注意が向けられている。ただ、欧米を羨望しながら、武力を用いることは良くないと言っているところに弱いながらも近代文明への一応の批判はある。そして、論理的にも内容的にも不十分であるが、日本の伝統の本質が美（→平和）にあり、その伝統から平和な殖産興業を説いているように見えることは——関連性が良く整理されていないが——彼の国粹主義の萌芽として注意しておく必要がある。そして、国粹の内容を平和ととらえていたこと、さらに、たんなる近代化論・殖産興業論とは違って、平和な伝統を産業立国に活かそうという発想があるように見えること、これらは伝統の解釈として、また、伝統と未来、伝統と近代の結び付け方としても——もし十分に深められるならば——まことすぐれた試みとなったはずであったのだが。